■第十章　火と燃料の考察

　前章とその前の章でナーガールジュナが主張したのは、行為の主体、感覚知覚の主体（自己）は実体としては存在しないということだった。行為主体と行為、知覚の主体と対象とは相互に依存し合って成立するものだからである。しかしそうした依存性というものは認めるが、それでも実体は存在すると考える者たちがいた。小乗仏教の一派であるヴァイヴァーシカ派 Great Exposition school（説一切有部／毘婆沙部）1 などがそうであるが、主体は知覚対象に依存するが、対象は主体に依存するわけではないという一方通行の依存性を主張したのである。彼らのような考え方の者によく用いられた例が、燃料と火の関係である。火は燃料に依存して存在するが、燃料は燃料として存在でき、火の存在に依存しているわけではない。目の前の事物（対象）と自己（主体）もこれと同じであり、実体と依存的生起とは共存できるというわけである。ナーガールジュナはこうした考えに反論するために、この「火と燃料の考察」という章を設けた。

１．　もし燃料が火だったなら
　　　行為主体と行為とは一つのものだということになる
　　　もし火が燃料とは異なるものなら
　　　それ（火）は燃料なしで生じ得ることになる

１．意訳
（火は燃料に依存しているが、燃料は火に依存して存在しているわけではないという例えを用いて、主体と対象／行為なども同じことだと言う者たちがいる。その場合まず、）もし燃料と火とが同一のものだったなら、行為主体と行為とも同一のものだということになる（ので、それは矛盾した言い方であり、彼らもそうは言わないだろう）。反対に、もし火と燃料とが別々の実体であるならば、火は燃料から独立して存在しているのであり、燃料なしで生じ得ることになる（ので、それも矛盾している）。

1. 'Cutting Through Appearances' The Practice and Theory of Tibetan Buddhism, Geshe Lhundup Sopa/ Jeffrey Hopkins, Snow Lion Publications 1989 p.179

２．　それは永遠に燃えているだろう；
炎は原因抜きで点火できるだろう
その始まりには意味がないことになる
その場合、それはどんな行為 action をもともなわないだろう

２．意訳
（火と燃料とがそれぞれ別々の実体ならば、実体としての）火は永遠に燃えていることになるだろう。（実体は原因などに依存せずに存在しているので、）炎は原因抜きで点火できることになるだろう。（火は点火されたことなく常に燃えていることにもなるので、）始まりという概念は意味をなさないことになる。その場合、火はどんな作用をもともなわないものであ（り、したがって何も燃やすことがないであ）ろう。

３．　他のものに依存することがないので
発火は原因なく起こるだろう
もしそれ（火）が炎のうちに永遠に存在するなら
それ（火）を起こすということには意味がないことになる

３．意訳
（実体であるならば）他のものに依存するということはないので、原因にも依存せず、発火は原因なく起こることになるだろう。もし実体としての火が炎の内部に常に永遠に存在しているのであれば、火を起こすという表現には意味がないことになるだろう。

４．　したがってもし誰かが
燃えているものが燃料だと考えるなら
もしそれがその通りなら
その燃料はどのように燃えていられるのだろうか

４．意訳
　したがってもし誰かが、燃えているものと燃料とが同一のものだと考えるならば、その火とは別の燃料が、火を除外してどう燃えるというのだろうか。

５．　もしそれら（火と燃料）が別のものであって、そしてまだ関係づけられていない一
方が（もう一方に）関係づけられることがないのなら
まだ燃えていないものが燃えることはないであろう
それら（火と燃料）が消滅することはない。もしそれらが消滅しないなら
それ自身の性質を持って永続するだろう

５．意訳

もし火と燃料とが実体として別々のものであって、お互いに関係を持たずに独立しているのであれば、まだ燃えていないものは永遠に燃えていないのであり、これから燃えるなどということは起きないであろう。火も燃料も燃え尽きるということはあり得ない。そしてもし火と燃料とが燃え尽きてなくなることがないのなら、火と燃料とはそれ自身の固有の本質を持って永続する実体だと言えるだろう。

６．　ちょうど男と女が
男と女としてお互いに関連し合っているように
火は燃料とは別のものであるにせよ
火と燃料とは関係性によって調和していなければならないであろう

６．意訳

（したがって火と燃料とが実体として独立して存在しているという考えは成り立たないのである。）火と燃料は別のものではあるが、男と女が別のものでありながらお互いに関連し合っているように、火と燃料も相互に依存し、関連し合っているものでなければならないのである。

７．　そしてもし火と燃料が
お互いに排除し合い
その上火が燃料とは別のものであっても
それでも両者は関連し合っていると主張されねばならないのである

７．意訳

そして火と燃料が（、燃やすものと燃やされるものという意味で、原因と結果という関係において）お互いに排除し合う概念であり、そういう意味で火と燃料とが別のものであるにしても、それでも両者は相互に関連し合うことで存在していると主張されなければならないのである。（結果は原因に対しての結果であり、原因は結果に対しての原因であって、片方だけでは存在できないように。）

８．　もし火が燃料に依存しているなら
　　そして燃料が火に依存しているなら
　　火と燃料とが依存的だということはどのように言えるのだろうか
　　どちらが最初に成立したのだろうか

８．意訳

（しかしあなたがた反論者はこう言うかもしれない。）もし火が燃料に、燃料が火に依存しているならば、両者が依存的関係をもって成立しているということ自体が、第三の、依存的でないような絶対的観点から言われているのではないだろうか。あるいは、燃料と火との関係のうち、どちらかがより優先的な立場にあるのであって、非対照的な依存関係であるということも考えられるのではないだろうか。

９．　もし火が燃料に依存しているなら
　　それ（燃料）はすでに確定されている established　火に関する立証 establishment になるはずである
　　また、燃料は火がまったくなくても
　　燃料であることができることになる

９．意訳

（あなたがたは火は燃料に依存するが、燃料はそれだけで独立して存在しており、火には依存しておらず、燃料は火の一方的な根拠だと言う。しかし）もし火が燃料という根拠に依存しているならば、その燃料は、燃料が燃料であると認識するために必要な火の存在を、もう一度立証しているものだということになるはずである。また、燃料は火というも

のがまったく存在しなくても、それ自身の根拠でもって、燃料という性質を持っていることができると言っていることになる。

燃料という概念は「燃えるもの」なのであり、燃やしているのは火であるから、火が燃えるという働きを除いてしまったら、もはや「燃料」という概念は存在しない。燃料としての「薪」ではなく、「木の枝」などと呼ばねばならないだろう。燃料が火に依存しないで存在すると言うことは、燃料がそれ自身の根拠で「燃料」としての性質を持っていることになるが、そんなことはあり得ない。燃料は火に依存しているのである。そして反対に、火は燃えるものである「燃料」がなくては単独で燃えることなどできないのであるから、火も燃料に依存している。一方向だけの依存関係などというものは成立しないのである。実体と依存性はいかなる場合も共存できない。

10. もしある存在が依存している（元の）ものが
その（ある）存在が（それに）依存している
（同一の）根拠によって成立するならば
何が何に依存することで成立するというのだろうか

10. 意訳
もしあるものが別のものを根拠にして、その別のものに依存して成立しており、その別のものも、同一の依存根拠に依存して成立しているならば、いったい何が何に依存して成立していると言っているのであろうか。

11. どんなものが依存性によって（実体として）確立されるのだろうか
もし確立されないならば、どうしてそれは依存できるのだろうか
しかし、もしそれがただ依存性によってこそ確立されるというならば
その依存性は意味をなさない

11. 意訳
（あなたがたは、依存的に生じるという原理によって実体的存在を主張する。しかし）何らかの根拠に依存し、その依存性という原理によって確証されるような実体などというも

のがあり得るだろうか。もしあり得ないならば、あなたがたが認める依存性とは何であり、どのように依存できるというのだろうか。もしあるものが依存性という原理を通して実体として確立されると主張するならば、その場合の依存性は意味をなさないであろう。

12.　火は燃料に依存していない
火は燃料から独立していない
燃料は火に依存していない
燃料は火から独立していない

12. 意訳
（あなたがたは燃料が実体だと認めているのであるから）火は燃料に依存していないことになる。（しかし、あなたがたの主張によれば火は燃料に依存しているのであって、）火は燃料から独立していないのである。（あなたがたは燃料をより根源的な実体存在だと考えるのであるから）燃料は火に依存していないことになる。（しかし、燃料は火によって燃えるものであるという根拠をもって「燃料」なのであるから）燃料は火から独立していないことになる。（したがって、あなたがたは矛盾した主張をしているのである。）

13.　火は何かそれ以外のものから起こるのではない
また、火は燃料自体の中に存在するのでもない
さらに、火とその他のものとはちょうど
動いたもの moved、動かないもの not-moved、そして行く者 goer のようである

13. 意訳
（火は燃料に依存して生じると言えるが、だからといって）火は、火以外の、たとえばより本質的な燃料などを根拠として、そこから生じるというわけではない。また、火は燃料自体の中にすでに存在しているというわけでもない。火と、火と依存関係にある火以外のもの――たとえば燃料など――との関係はちょうど、（第二章ですでに分析済みである）動いたもの、動かないもの、そして行く者と同じである。（運動主体と運動とは同一であるとも完全に独立しているとも言えないし、運動主体の中にあらかじめ運動が存在しているのでもない、というのが第二章の分析であった。）

14.　燃料は火ではない
火は燃料以外のいかなるものからも起こることがない
火は燃料を所有していない
燃料は火の中には存在しないし、その逆もまた真である

14．意訳
　燃料と火とは同一の実体ではない。しかし火は燃料に依存し、燃料からしか生じない。だからといって火が燃料を所有しているという関係でもない。燃料は火の中に存在しているのではないし、火が燃料の中にあらかじめ存在していて、それが現れるのでもないのである。

15.　火と燃料に関する議論によって
自己と集合体（蘊）、瓶と衣服
これらすべてが
余すところなく説明された

15．意訳
　ここまで述べてきた火と燃料とに関する議論によって、自己と自己を構成している心身の集合体の問題、特定の性質（結果）とその根拠（原因）、主体と対象などの問題すべてが完全に説明されたことになる。

　ここで余すところなく説明されたのは、依存的なものと実体との共存や、二つのもののうちの一方が他方にだけ依存するような一方通行の依存関係という説明が矛盾したものだということを明かしたということである。こうした論理を用いる者はその時々において、自己と自己の構成要素である集合体との関係について言っていたり、主体と対象との関係について言っていたりするであろうが、どんな説明であれ、「相互」依存関係以外の説明は矛盾するというのである。

16.　自己が諸々の存在 the entities と同じであるとか
異なっているとか説く人が
教義 doctrine （法）の意味を理解しているとは
私は考えない

16. 意訳

自己がそれ以外の何らかの事象と同一物であるとか、絶対的に異なった物であるとか説明するような人が、ブッダの教えを理解しているとは私は思わない。

諸々の存在 the entities という表現については、意味の上からは「実在」という訳語はふさわしくないので、このように訳しておいた。

同一性とか差異とかいう区別は、人間の認識構造に根ざした因果関係的認識、もしくは概念認識からくるものであって、認識する人間の存在というものを除外しても存在するような、絶対的存在や実体ではないのである。カント流に言えば、同一性や差異といった原理は「もの自体」に属するものではない。あくまでも「現象」なのである。これは西洋の、たとえばカントが言うような意味での「現象」としてもそうであり、仏教の基本的概念である「現象的真実（世俗諦）」という意味でもそうである。主観の側ではなく、事象の側に含まれるような同一性／差異性の原理などというものはあり得ない。